

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# 監獄の墮天使

---

## バトルマーメイド

小説 小湊拓也

挿絵 あめいすめる

ラウンド1	ブルー・パッション	006
ラウンド2	ブラッディ・マーメイド	034
ラウンド3	インビテーション	050
ラウンド4	ビースト・ファイト	063
ラウンド5	アンダーグラウンド・プロレス	090
ラウンド6	バージン・ピンク・マーメイド	104
ラウンド7	クイーン・オブ・ダークネス	143

## 登場人物紹介

Characters



いくしま しょうこ  
**生島 翔子**

バトルマーメイドとして、アテナ・ジャパンのリングで活躍する覆面レスラー。現3 WGPチャンピオン。

きたかみ きやか  
**北上 早矢香**

前3WGPチャンピオン。アテナ・ジャパンのエースとして活躍していたが、後輩の翔子に敗北を喫し、リングから姿を消す。

みたに はるな  
**三谷 春菜**

バトルマーメイドの付け人である新人少女レスラー。

ひょうの  
**豹野**

早矢香に付き従う男子レスラー。

てつかわ  
**ミスター鉄川**

凶器攻撃で名を馳せる異色レスラー。

**ブラックバイパー一号、二号**

連携攻撃を得意とする覆面レスラー二人組。

なかの こういちろう  
**中野 広一郎**

株式会社アスリーツフレンド・ナカノ代表取締役であり、非合法地下プロレス『CIC』の主催者。

優美な口調と裏腹な握力が長手袋に籠もり、必死に閉じようとす翔子の口を無理矢理開きにかかる。細く長い指が滑らかな頬を、そしてガッチリ噛み合わされた奥歯を圧迫する。仮面の美貌が痛々しく歪み、そこへ鉄川の肥え太った腰がさらに寄せられる。

翔子はきつく目を閉じ、溜まっていた涙を搾り出した。

言葉なのか単なる笑いなのか判然としないものが、鉄川の口から漏れた。

「れ、れふえ、ふえっへへへ……」

レフェリーの役目を務めさせてもらう、とでも言っているのか。

この男は明らかに増長している。一対一ではどうにもできない最強のヒロインに対し、北上早矢香の威を借りてとてつもなく汚らしいことをしようとしているのだ。バトルマードであるこの自分に。

許されることではない、その思いと共に目を開く。途端に視界を満たした赤黒さ、耳障りな劣情の音色を響かせる巨大な肉の鈴を睨み据える。

縦長の裂け目から濃密な粘り気を先走らせる、男の先端。その滑稽なほど張りつめた形状と漂う牡臭が、早矢香によって封じられかけていた抵抗力を復活させる。鍛え抜かれた女子プロレスラーの半裸身の中、それがマグマのように高まっていく。

爆発させ、先輩の腕を振りほどきつつ立ち上がり目の前の醜悪な肉塊を蹴り潰す……。

それを実行する寸前。胸を弄び顎を拘束していた長手袋の両手が、翔子を解放した。

「え？ なに……ウグッ」

解放はほんの一瞬の間だけだった。バトルマーメイドの反発力の噴火を直前で察知したかのように、早矢香の両手が再び翔子を捕らえる。束縛される部分が変わっただけだ。

ただ後輩の身体を弄んでいた好色なだけの先輩が突然、プロレスラーに戻った。そんな凄まじい拘束力がバトルマーメイドの片腕と首に絡みつく。

背中に押しつけられ鉤型に固定された右腕は微動だにせず、直角を形作った上腕と前腕の間に下から通された早矢香の右腕と、首に巻きついた左腕が、右鎖骨の辺りでがっしり結びついている。

フェニックス・ロック。不死鳥の翼をもへし折るという意味で北上早矢香が名づけた技で、相手の首と利き腕を背後から同時に極める。左腕は自由だが、それで脱出ができるような技ではない。

首の横で強烈に握り合った早矢香の両手が、グイッと鎖骨を圧迫する。頸動脈を締められ脳への酸素供給が滞る感覚と、右腕を鉤型に極められる激痛とが、同時に翔子を襲う。

その痛みに呼応するものがある。先程、膝蹴りを喰らった時と同じだ。締め上げられる喉からは声は出ず、ただ息を呑む微かな音だけが走る。

「ぐっ……うッ！ うあっ、あ………んっ」

ギリッ、と右腕の骨が悲鳴を発する。激痛が、あの口移しの甘味と体内で混ざり合う。

それによって痛みではなくなったものが、半裸の全身をぞくぞくと走り抜けた。

酸素の少なくなった脳にまでそれが及び、束の間、翔子の脳裏を桃色の靄が覆う。強固な横線の形に結ばれていた唇が、甘ったるさを帯び始めた呻きを発する。

髪を鷲掴みにされる僅かな痛みが、目前の危険に対する注意を辛うじて彼女に取り戻させた。押しつけられてくる鉄川の下半身。束縛されていない左手を、翔子はとっさに反応させた。跳ね上げ、掌を開き、頬に触れる寸前だったものを掴み止める。生まれて初めて目にした男性器を、その日のうちに素手で触れるところまでいってしまった。

劣情の膨張体の感触と体温が、掌の中で魚のようにビクン！ と跳ねる。

おぞましいが手放すことはできない。離れた途端、唇を狙って突き込まれてくるのは明らかだ。今の状態では顔をそむけることもままならない。

絶大な力を秘めながらも細く整った女子プロレスラーの五指が、じんと欲望をかき鳴らす肉の鈴をギョツと握った。

潰してやる、という考えが浮かぶ前に、手の中で脈打つ圧力が増した。これ以上ないというくらい勃起していた鉄川の亀頭が、バトルマーメイドの握力に反応してさらに一回り近く膨れ上がったのだ。

(やっ……こ、こんなに硬くなるなんて……)

翔子は狼狽し、どうしてよいかわからぬまま、初めてのペニスをただ握り続けた。親指、

人差し指、中指で亀頭部を包み、残る二本を竿の部分に当てる。

先輩の微かな嘲笑が、後ろから耳を觸る。同時にフェニックス・ロックの締めつけが強まった。しなやかな二の腕の感触が、頸動脈を柔らかく圧す。

酸素が失われつつある脳に、早矢香の囁きが流れ込む。

「欲しいんなら、無理することないのよ……ほら、お口を開けて」

「誰………がっ………！」

重症の喘息患者のように声を搾り出す翔子。無意識に左手に力が籠もる。細く強靱なバトルマーメイドの五指が、どくどくと震える劣情の塊をきゅうつと圧迫した。

「おっ！ おほうふっ！」

鉄川の叫び。赤黒く膨れた海綿体が白い女の指をまとわりつかせたまま発作的に震え、粘液をトピュッと吐き出したのだ。ぬめる生暖かさが翔子の手の中に広がった。

もはや耐えられぬといった様子で、眼前の肥満体が全身の力で腰を突き入れてくる。震えひくつく肉根の質量が左手の中で一気に増大した。男の欲望を限界まで漲みなぎらせたそれが、白く濁る潤滑液にまみれた女子プロレスラーの手をぬるりと振り切った。

そして一気に、バトルマーメイドの唇を奪う。

「むっぐ……ッ！」

むせかえるような生臭さと男の味が口の中に満ち、呻きを塞ぐ。頬の内側の柔らかく湿

った肉に包まれた瞬間、臓物のような肉棒がさらに膨張し呼吸をも圧迫した。

封じられた悲鳴の代わりに、長い髪が左右に暴れる。たとえようのない不味さを翔子は必死に吐き出そうとするが、それは舌を激しくのたくらせて口内の肉塊を舐め回す結果になった。快感の悲鳴を放ちながら鉄川は調子づき、女子プロレスラーの頭を両手で押さえ、一物をくわえ込まれた腰を、美貌を粉碎するような勢いで前後運動させた。

グチッ……グチユウウ……。

精液と唾液が口の中で混ざり合い、かき回され、いっばいに開かれた唇から溢れ出して早矢香の腕をも汚す。彼女は大きくして気にしたふうもなく、相変わらず楽しげな口調で翔子の耳をいたぶった。

「美味しそうにしゃぶっちゃってまあ……無理してたのねえ今まで」

(ち……がうっ……)

声にならぬ必死な否定を嘲笑うように、鉄川は翔子の唇を犯し続けた。醜く膨らんだ海綿体が柔らかな舌をこね回し、とめどなく溢れる牡のぬめりを清潔な口内に塗りたくる。

北上早矢香の復讐。今がまだその序の口であるのは明らかだ。

闘う人魚姫の、仮面の美貌。それが今は男の劣情の詰まった膨張体をくわえ込まされ、長い髪を悶えさせている。

「んふう……んんっふ……うっ」





口で封じられた呼吸が一気に鼻に回され、突き出された顔の中心が仔犬かウサギのようにヒクヒクと蠢き、格好悪くちぢれた陰毛を嗅いだ。

「ぐむっ！ ……んっ、んんんんうううっ…！」

屈辱の呻きが、獯猛に口の中を蹂躪する勃起体にすり潰される。

「変わらないわねえ、あんた昔っから……あたしがあげたものはなんでも美味しく食べちゃうようになってるのよね、その口は」

冷酷で涼やかだった早矢香の囁き声に少しずつ、復讐の歪んだ快感が滲み出る。

なにも言い返すことができないまま、ただ拒絶の形に髪を振り乱す翔子。だがその頭の中では、嚴重に封印してあった忌まわしい記憶がまたもパンドラの箱から脳漿へと流れ出していた。口を辱める肉棒の生臭さが、それをもかき回す。

すべて振り払うように暴れる翔子の頭を、鉄川はその単純な力だけは強い両手で容赦なく掴んだ。恥辱に歪んだマスク・ウーマンの美貌に股間を押しつけ、形よい鼻に陰毛を擦り寄せ、唇を犯した。

凌辱者を追い払わんとする舌の暴れようを楽しみ、柔らかな粘膜を蹂躪する。葉を染み込ませた綿棒で風邪の治療をする時のように、牡の液体溢れる亀頭部を喉奥に塗りたくる。ヒクヒクと血管を痙攣させる肉茎の感触が、舌の上で弾けた。

ドッ……ピュウッ！

男の先端が、口の中で爆発した。震える喉に、白濁したタンパク質の流動体が大量に流し込まれる。虐殺された幾億もの精子の怒り、嘆き、暴れようが感じられるほど荒々しい喉越しが、翔子の白い首を襲う。

「ぐぶっ……は……っ！」

鉄川が引き抜いた。白くドロドロとした吐瀉物が犯された口から溢れ出し、幾筋もの雫となつて唇から垂れる。

とめどなく白い火花を上げる一物を鉄川はなおも翔子に向け、搾るようにしごいた。

ビチャ……ビチャアッ。

おぞましい粘液の着弾、その感触が胸元に腹部、それに太腿を襲った。

健康的な張りとは色艶を漲らせた両乳房の谷間を、白い雫がドロッと流れ落ちる。美しい腹筋のラインを伝い、一度ヘソの窪みに溜まった後、青いショーツに向かって垂れていく。悔しげにマット上でもがく両脚にも、瑞々しい肌の白さとは異質の白色の汚れがベツトリ貼りついている。柔らかく強靱な筋肉が詰まった太腿の丸みを這いながら、それがキャンパスに垂れ落ち、美脚の肌に粘液の跡を残した。

鍛え抜かれ、野性的に引き締まったバトルマーメイドの半裸身。リング上では気高さを保ち続けていたその身体が、今は汚辱のぬめりをこびりつかせた様を呆然とさらしている。鮮烈なマリンプルーと若々しい肌色との美しいコントラストに、汚らしく濁った精液の

白が無理矢理にぶちまけられた無惨な姿。その穢けがされた肢体をキャンパス上に座り込ませながら、翔子はのろのろと両目を擦った。

フェニックス・ロックをいつの間にか解かれていることにも気づかぬほど、頭の中は空白だった。なにも考えられない。少しでも脳を働かせた途端、半裸の全身に付着し這い回る虫のように流れつたうタンパク質のおぞましさをも知覚しなければならぬからだ。

涙を拭う。自分が泣いていたことを翔子はようやく知った。

泣かされた。空白だった脳にまずその意識が浮かぶ。疼き始めた屈辱が、麻痺していた女子プロレスラーの身体を覚醒させていく。

全身に付着した精液の嫌悪感も一気に蘇るが耐えつつ、バトルマーメイドは生ける屍の姿勢から弾けたように立ち上がった。同時に振り向く。

優雅に一休みといった風情で長身をロープに預けている早矢香と目が合った。冷たい笑みが返される。

「さすがに、あんたのクソ生意気な根性はこのくらいじゃ折れないみたいね？」

高級なソファアーに身を沈めるようにゆったりと、黒衣の女子プロレスラーがロープに体重をかけ後ろに倒れ込む。

「それでいいわ……あの時あたしが味わった惨めさの万分の一にも、まだなっていない」  
たわんだロープが前方に早矢香の身体を押し返す。反動を得た長身が、ゆらりと翔子の

方に傾いてくる。よろめくようなその頼りない動きは見せかけで、凶暴そのものの攻撃の気配を翔子のプロレスラーの感覚は逃さなかった。対抗手段を頭で考える前に、身体が跳躍する。

下半身で噛みつく。そんな勢いと力を籠めて両脚を早矢香の首に巻きつける。先輩の美貌の端正な凹凸が、薄い青色の生地の上から股間に密着する。そのくすぐったさに耐え、一気に全身を反らせる。カウンター式のフランケンシュタイナーが、突進力を保った黒衣の長身を前方へ投げ飛ばす……。

否、踏ん張られた。相変わらず、女子プロレスラーとしては常軌を逸した筋力だ。

嘲笑の息遣いが股間にある。早矢香の首から逆さまにぶら下がったバトルマーメイドの身体が、狼狽の悶えを見せた。

「この……っ！」

牝の荒馬のような両脚で、根を下ろしたようにフランケンシュタイナーに耐えつつ、早矢香は顔に巻きついた白い太腿をガッチリと押さえた。そして後輩の、ショーツ越しの匂いを貪る。

リングにしつかりと根づいた大木に、逆さまに吊るされている。そんな状態になった半裸身を振り子のように暴れさせる翔子。水着の上から押しつけられる美貌がヒクヒクと貪欲に動いている。匂いを嗅がれる違和感が身体を駆けた。

「やっ……やめっ！」

びつちりと粘液に濡れたマリンプルーを裸体の何か所かに貼りつけただけのバトルメイド、その逆さ吊りの肢体が長い髪を振り乱しつつ魚のように跳ねる。釣り上げられた人魚そのものの風情だ。暴れる半裸身から、汗と一緒に精液が飛び散る。

少し息苦しうに、だが心地よさげに翔子の匂いを吸いながら、早矢香が笑う。

「ふっ……うっふふふ、もう蒸れてきてるわよ？　ここ。頑固に閉じちゃってるけど、奥の方じゃ溶けそうに熱くなって……匂いで、わかるくらいにね」

「なにをっ……うっ、く……っ!?」

突然、早矢香の長身が反った。吊るされたバトルメイドの身体が一度持ち上がり、即座に振り下ろされる。パワーボム。空気を切る音の中でとっさに判断しつつ、翔子は胸に密着するほど顎を引いた。ヘソを見る。アテナ・ジャパンの道場で叩き込まれた、受け身の鉄則である。

衝撃、それと同時に両腕でキャンバスを叩く。マットに打ちつけられたダメージを背中と両腕に分散し、後頭部だけは辛うじて守る。

だが拡散したのはダメージだけではなかった。じわり、とした熱さと疼き。それが身体中にばらまかれたような衝撃だ。

痛みが快感に変わる、と早矢香は言っていた。確かに、パワーボムの痛撃が熱く気怠い

ものに変換され、体内を駆け巡っている。

直撃から守ったはずの頭にまで、それが及ぶ。脳漿がじんわりと温まり、翔子の意識は一瞬どこかへ飛んだ。そんな状態でも、太腿の間で味見のような動きを続ける唇の感覚だけは鮮明だ。

「翔子のここ、久しぶりだわ。赤ちゃんみたいに可愛くて……そのくせいやらしくって。ほおら……」

その唇から舌が伸びたのがわかる。固く密着した大陰唇の合わせ目に沿って、湿った柔らかさがぬるりと這う。青いショーツの上から、唾液を塗り込まれた。

「ひっ……ああ……っ」

翔子の声が、裏返りかけた。

先程の鉄川による責めとは似たようで異質の感覚が、拒絶の施錠がされたバトルマーメイドの秘所をゆっくりと開きにかかる。早矢香との間の忌まわしい過去の記憶、それを封じ込めた頭の中の扉も、開かれつつあった。

不意に翔子の視界に、自分の姿が飛び込んでくる。天井際的大型スクリーンに映ったバトルマーメイドの現状。パワーボムの姿勢で逆さまにマットに押しつけられた半裸身が、形のよい両脚をはしたなく開いているのだ。

上を向いた股間の有り様が、拡大された。未熟な果実の如く締まっていたショーツの盛

り上がりが、今は甘い蜜をたっぷり含んでいるかのようにふつくらと緩んでいる。その真ん中に裂け目の形に走った凹みを、早矢香の舌尖が味わうように這う。

「やつ！ やめて……え……」

半開きの口の中で、まだ男の味が残った舌をふるふると痙攣させる翔子。スクリーン内の己の恥態からなぜか目を逸らすこともできず、背中と両肩をキャンパスに固定された上半身は微動だにしない。まともなプロレスなら3カウントが入っているところだが、そんな逃げ道のないリングである。

自由なはずの両脚も、しどけない大開きの格好のまま爪先で弱々しく宙を搔くだけだ。

この先輩の付け人になった、その日のうちにこうして犯された。脳と肉体の双方でその記憶が解放され広がっていく。それが、このような屈辱的な状況を普段なら即座に打破できはずの戦闘能力に麻酔として作用した。

「どうしたの翔子。初めてしてあげた時みたいにもっと元気よく暴れてみなさい？」

桃色の舌が声を発しつつ跳ね踊り、翔子の股間を苛め続ける。

舐められる割れ目の線が、いつの間にか二重だ。鎖きされていた大陰唇の門があえなく開き、内扉の小陰唇がマリンプルーの生地に浮かび上がっている。そこを這う舌尖の圧力が、ノックのような軽いものから強引に押し開く重さへと高まっていく。

間にあるはずの水着の感触などは、ないに等しかった。蜜のような豊潤な唾液がショー





ツ部分を溶かしてしまったかのように早矢香の舌は、翔子の秘唇に直に凌辱感を塗り込んでくる。

「いやっ、あ……っ！ ああーっ！」

無理に抑えた感じに漏れていた翔子の声が、澄んだ甲高さを帯び始める。男たちに舐められていた時にはなかったものだ。裸に直接の辱めを受けていたあの時は、拒絶という鎧を心に着せることができた。一応は水着を隔てているはずの今はしかし、その上からじわりと貼りつけられてくる濡れた感触に心の方が裸に剥かれつつある。

ラヴィアの合わせ目の辺りが小さく、だがくつきりと膨らみ、青い水着を真珠の形に盛り上げている。全裸の時よりもくつきりと、二十歳の女性器の形が薄いショーツ部分に浮かび上がり、高画質のスクリーンの中でさらしものとなった。

鉄川に舐められていた時にはあれほど強固に閉じていた処女の肉門が、早矢香の舌によって呆気なく開かれ、隠されていた真珠を暴き立てられたのだ。昔から今に至るまで、自分の身体のすべてがこの女性に知り尽くされてしまっている。今さらながら、翔子は思い知らずにはいられなかった。

冷笑する早矢香の舌が、形露わなクリトリスの隆起を軽く転がす。

「ああっ……ひっ！」

悲鳴と共に、電流が全身を駆け抜ける。フォールを跳ね返す形にバトルマーメイドの半

裸身が跳ね、肩と背中がマットを離れ、頭で体重を支えるような格好となる。

そのままヒクヒクと痙攣する後輩の身体を、早矢香は再び無理矢理に、パワーボム・ホルドの形にマットに押しつけた。

そこへにじり寄ってくる肉の質量。みし、という軽い振動が翔子を揺らす。

鉄川だった。

「ぬふっ……ふごっ」

壊れた大口から荒く口臭を吐きながら、豚のような巨体が迫る。パワーボムの形に固められたまま、翔子は逆さまの表情を青ざめさせた。こびりついた精液を冷や汗が溶かす。

一対一でどうにでもできる相手のはずだった。バトルマーメイドが、素手のプロレスならば問題にもならぬ三流レスラーを相手に、強姦される寸前の若い娘そのものの弱々しきを見せているのだ。

ゆっくりマットを踏む足音と共に、鉄川の身体が視界の中で大きくなっていく。特に、ズボンからはみ出した肉塊が。翔子に向かって思う存分に放出したはずのそれは早くも復活し、露出した臓物のように膨れ脈打つ先端部の狙いをバトルマーメイドに定めた。今の翔子は、それを真下から見上げる格好だ。

つい今まで続いていた早矢香の責め。それが鉄川の鎖鎌よりも執拗に強固に、バトルマーメイドの身体を内側から束縛しているのだ。じわじわと体内に拡散した得体の知れぬ感

覚が、女子プロレスラーの抵抗力を麻痺させている。

覆い被さるように屈み込む鉄川。

その気になればこんな男など一瞬にして振りほどき叩きのめすことができるバトルマーメイドの身体能力が、今はまったく働かない。空手とプロレスで習得した蹴りの放ち方も忘れてしまった両脚を、だだっ子のようにばたつかせるだけだ。むなしく暴れる美脚の弱々しさを鉄川は明らかに楽しんでいる。

悲鳴を囁み締め、眼前に迫ったものを睨む。力を取り戻した鉄川の一物。その先端から発せられる白濁の雫が一滴、頬に滴った。

鉄川は逆に翔子の恥部を覗き込み、上を向かされたバトルマーメイドの股間にねっとり視線を粘りつかせる。

早矢香がいきなり、翔子の胴体を離れた。解放したわけではない。男がこれから行おうとしていることを手伝ってやるように、後輩の両脚を押さえ込む。

開かれたバトルマーメイドの太腿を、眼前に見せつけるように長手袋の両手が固定した。「ぐふっ……お、おひりい、グフフフフ」

鉄川の舌なめずりが聞こえる。

丸く形よく盛り上がった、女子プロレスラーの裸の尻。湿気を感じさせる激しい息がそこに吐きかけられるのをまず感じた。続いて、ピチャッと唾液を飛ばしつつ貼りつく舌。

豹野の目も飛び出しそうなくらいに血走っている。漏れた言葉が、すぐに意味のない叫びに変わってしまった。

男の両腕が、翔子の両太腿を掴む。突き入れられた腰が前進後退の動きを繰り返し始めた。次第に速度を上げ、荒々しいピストン運動になっていく。

柔軟な女陰がいつぱいに、ちぎれそうなくらいに伸び、それでも負けじと収縮し柱のような肉棒を圧迫する。口に入りきらないほど大きなものを無理矢理頬張り、咀嚼しようとする。そんな様子だ。

腔壁のシワが引き伸ばされてツルツルになったような感覚が、下腹の中で烈しく這いずっている。性交とは直接関係のない周辺の消化器官や泌尿器にまで凌辱の振動は及び、特に小腸がそのまま一匹の大蛇に変わったかのような奇妙な疼きが発生していた。

蠢動しているのはそれだけではない。臓物を揺さぶる豹野の陰茎に、何匹ものミミズがまとわりつきピクピク動いているのが感じられるのだ。男の肉柱にびっしりと浮かんだ、血管だった。

「アッ……お、おと……こ………」

溢れる唾液を止められなくなり始めた口が、あられもなく咬く。

鮫の如く暴れて女体を抉る凶太い亀頭、その大きく張り出したエラが鋼鉄のシャベルのように腔内を削り取っているような錯覚がある。それだけではなく翔子の、バトルマーマ

イドとしての理性をも身体の外に引つ掻き出すほどの激しさだ。実際に掻き出されているのは、女性器保護のためにとめどなく分泌される潤滑液で、広げられ圧迫された陰唇からどくどくとそれが溢れ出す様はまさに唾液を垂れ流す貪欲な口だった。ぐちゅつ、グチョッ、と音を発し、健気に懸命に男の肉杭に対抗しようとしている。弾き出されたクリトリスが、負けてたまるかといった様子で震えた。

「あつ、ああつ、いやっ！ お、なか……中でっ……！ だされっ……ちやううっ！」  
敗北の危機感が警告音を発しながら頭をもたげるが、同じようにムクムクと起き上がるうとするなにかが翔子の中には確かにあった。女として、誇り高きヒロインとして、バトルメイトとして、絶対に否定しなければならぬものが。

そんな必死な思いとは裏腹に、女子プロレスラーの強靱な下半身が、瑞々しい筋力を腔に向かつて一気に収束させる。意思ではなく、身体の反応だった。締めつけだけではなく、自由にならぬ腰を左右に揺らしあるいは跳ね上げる。体内での男の動きが単純な前後運動から、腹をあちこち突き抉る複雑でより激しいものに進化した。

ビクク……ウウウッ！

亀頭の跳ねる音が身体の奥から聞こえた。陰茎に絡みつく血管の一本一本が活発にうねり暴れる。

「な………に………あッ、アアアウッ」







った男根とのピチツとした合わせ目から噴水の如く弾け出た。

ブシュッ……ウウウ……。

その圧力に押し出された形で豹野の一物が、女子プロレスラーの暴れる下半身から引き抜かれた。ずらされていた水着が再び、膨れ上がった牝肉の隆起にびったりと貼りつく。

最後の二、三滴を滴らせながら力尽き萎びてゆく男性自身をズボンにしまいませず、マツトに尻餅をつき笑う豹野。

「へ……さ、最高だったせてめえ。犯られるために生まれたような身体だなあオイ」

呆然と聞き流しつつ翔子もキャンバスに沈んだ。ロメロ・スペシャルを解かれた半裸身が、ゆつくりとリング上に転がされる。うつぶせにマットに倒れた身体の中で、下腹部に溜まった精液がタプッと揺れる。

中に、出された。妊娠云々といった不安よりもまず翔子の頭を占めたのは、負けた、という事実だった。単に試合に負けただけではない。女として、バトルマーメイドとして、あまりにも決定的な敗北。

「ほら、まだ終わってないわよ！」

早矢香の罵声と共に衝撃。黒いリングシューズの爪先が、翔子の腹に食い込んでいたぶん、と臍口に溢れた精液を揺らしつつバトルマーメイドの下半身が浮き上がる。

「うっ……ぐぐ」

子宮を揺さぶる感覚が、凌辱に打ちのめされた半裸身を跳ね上げた。今やはっきり快感と認識できてしまう刺激に、裸の尻が突き上げられる。

片頬を擦りつけたマットに唾液を垂れ流す翔子。他に乳房と掌、両のレガースをマットに押しつけ、腰だけを浮かせた格好で半裸身を震わせる。尻から太腿にかけての裸の曲線がぐっと持ち上がり、流し込まれた精液をたふたと鳴らす。

先輩の蹴りがもたらした熱っぽい快感が、そんな恥辱的な姿勢のままバトルマーメイドに金縛りをかけている。

「さあて……お客さんにもわかるように、しっかりと判定しないとねえ」

言いながら早矢香が、微かな身振りで豹野になにか命じたようだった。それに応じて、翔子の近くに男の気配が立つ。

さらしものになった女の恥部に豹野の手が伸びてくるのがわかったが、物理的にはなんの束縛も受けていないはずの身体が、少しの抵抗も示すことができない。

男の指がショーツ部分を引っ張り上げると同時に、抉られた果実のようになった大小の陰唇がまるび出て粘性のある水気を散らす。

ぐちゅ……と豹野の指先が突き刺さった。

「やめて……………」

キャンパスにキスをするような位置にある唇が、弱々しく声を漏らす。その力ない言葉

ほどにも、身体は拒絶の方向に働いてはくれなかった。マットから持ち上げられた尻の動物的な膨らみがヒクヒクと震えるだけだ。

上等な刺身を思わせる小陰唇を、豹野の指が抉り開く。先程から下腹部内で揺れていた液体が、トロリと流れ出た。幾億もの精子の死骸が白濁した汚物となって内腿を伝う。愛液と混ざり合い、トプッ、と微かな音を発して、無惨に拡張された秘唇から流れ出す。むっちりと押し上げられた尻が切なげに揺れ、精液を搾り出すようにそのひくつきを激しく始めた。

「あ……ああ……っ」

力なく漏れる声が緊張感を帯びる。恐ろしく無様なことになろうとしている、それに対する恐怖に近いほどの警戒心。うつぶせの身体がのけ反り、キャンパスに密着していた顔が跳ね起きる。長い髪が、こんな時でも若々しく宙を踊った。

太腿を流れつたう粘液の感触が増していく。マットに滴り落ちる音まで聞こえてくる。

失禁と同じようなその醜態がスクリーンの中で拡大された。形よく引き締まり盛り上がった白いヒップと太腿の間、臓物の赤みを剥き出しにした女性器が、子宮に入りきらなかった牡液をトロトロと吐き出しているのだ。呆然と見上げる翔子自身にはグロテスクな有り様にしか見えないが、客席を満たす男たちの目には至上の光景として映ったようだ。ため息と歓声が場内の熱気をかき乱す。



「ん〜……これは文句のつけようがないくらい、中に出されちゃってますねえ」

早矢香は再びマイクを握っていた。その視線が翔子の恥態を舐め回しつつ、ゆっくりと動く。ロープ際で気を失っている春菜に、やがて止まった。

「やめてっ……！」

よろよろと腕立て伏せをするように、上体を起こす翔子。

「お願い、春菜には……」

「ルールの変更は認められないわ、バトルマーメイド選手。あんたたち二人とも犯られない限り、あたしの勝ちにはならないのよ？」

長手袋の片手が翔子の髪を掴む。青いマスクで隠しきれない弱々しさを滲ませ始めた後輩の表情を、いたぶるように覗き込む早矢香。

「あんたが落ちるまであの子には手を出さない、確かにそう言ったけど。落ちちゃったじゃない翔子……ひよっとして、ギブアップして試合終わらせようと思ってるの？」

冷酷な握力が髪に籠められる。

「言っとくけどね……負けを認めるっていうのはね、自分の一番惨めな姿を大勢の人間に見せるってことなの。負けましたの一言で済まそうなんて甘いよ。特にこのC I Cのリングじゃね」

「なんでも、します……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**